

詩人・尹東柱^{ユンドンジュ}の十字架

井田 泉

京都キリスト教協議会 キリスト教一致祈祷週間
2023/01/22 聖アグネス教会

今、マタイによる福音書からこういう言葉を聞きました。

「裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」25:36

けれども今日お話しするその人は、獄中にいても訪ねてくれる人はなく、この寒い季節に暖房のない福岡刑務所のコンクリートの独房で次第に衰弱していました。独房にあるのは、彼が頼んで差し入れてもらった英語と日本語対照の聖書1冊です。

わたしたちは先ほど詩編42編を唱えました。

「神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう、『み顔こそ、わたしの救い』と」。

おそらく彼も、聖書を開いて、ひとりこの詩編の祈りの言葉を唱えていたに違いありません。

彼の名は尹東柱^{ユンドンジュ}。しかし日本ではその名を用いることは許されず、大学でも下宿でも、警察署でも刑務所でも、「平沼東柱^{とうちゆう}」と呼ばれていました。しかしここではもちろん、彼の本来の名で呼びます。今日は韓国・朝鮮のキリスト者詩人、尹東柱のお話をします。

尹東柱。1917（大正6）年、朝鮮東北部から中国に入ったあたり、北間島^{フッカンド}と呼ばれる所で生まれて、すぐに幼児洗礼を受けました。平壤およびソウル（当時、京城）で学び、日本に留学して立教大学、ついでこの京都の同志社大学で学びました。1943年、夏休みで帰省する準備をしていたところ、下鴨警察の特高に逮捕され、「治安維持法違反」の罪名で京都地方裁判所で懲役2年の判決。1945年2月16日、福岡刑務所で獄死しました。満27歳。あと半年待てば日本は敗戦、朝鮮は解放を迎えるはずでした。78年前のことです。

彼は何も秘密結社を作って独立運動をやったわけではありません。ただ失われていく、奪われていく朝鮮語、朝鮮文化を愛して、その大切さを友人たちと語り合った。自分のその言葉で詩を書き、日記を書いた。それが日本の「国体」に反逆する犯罪とされたのです。

彼はソウルの延禧専門学校の時代に、詩集を出したい思いがあったのですが、時局がらそれがかなわず、彼が亡くなって3年後、友人たちと彼の弟さんの熱意によって最初の詩

集が出版されました。『天（そら）と風と星と詩』(하늘과 바람과 별과 詩) という題名です。その中に含まれる詩を今日は三つ紹介します。まず「新しい道」、20歳の時です。

尹東柱は中学を卒業して、1938年4月、ソウルにある延禧^{ヨンヒ}専門学校に入学しました。延禧は有名なキリスト教の学校で、今日の延世大学校の前身です。この詩は5月10日となっているので、入学の翌月の作品ということになります。(訳はわたしの訳です。)

새로운 길←

←

내를 건너서 숲으로↓

고개를 넘어서 마을로↓

↓

어제도 가고 오늘도 갈↓

나의 길 새로운 길↓

↓

민들레가 피고 까치가 날고↓

아가씨가 지나고 바람이 일고↓

↓

나의 길은 언제나 새로운 길↓

오늘도…… 내일도……↓

←

내를 건너서 숲으로↓

고개를 넘어서 마을로←

新しい道

1938.5.10

川をわたって森へ

峠を越えて村へ

昨日も行き、今日も行く

わたしの道、新しい道

タンポポが咲き、かささぎが飛び

娘が通り、風が起こり

わたしの道はいつも新しい道

今日も……明日も……

川をわたって森へ

峠を越えて村へ

希望に満ちた明るい詩です。言葉もわかりやすい。けれども時代は、大日本帝国による植民地支配がますます厳しくなる時代でした。ことに日本による神社参拝の強制が、朝鮮の学校だけではなく、キリスト教会にも及び、教会が呻吟していた時代です。

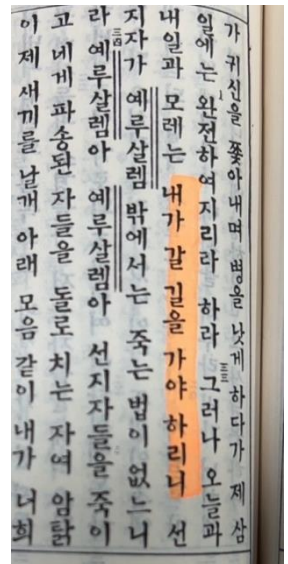
「昨日も行き、今日も行く／わたしの道、新しい道」という言葉には、困難に直面しつつ前に向かって道を進もうという決意が込められているように感じます。

ところでルカによる福音書第13章にこういう箇所があります。ファリサイ派の人々が近寄って来てイエスに言いました。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています」(13:31)。それに対してイエスはこう言われました。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」(13:32-33)。

イエスが死を覚悟して「今日も明日も……自分の道を進まねばならない」と言われたその思いが、尹東柱の「昨日も行き、今日も行く／わたしの道、新しい道」と響きあっている気がします。

尹東柱の詩の中でキリスト教的なものをはっきり前に出したものは、必ずしも多くありません。けれども次に紹介する「十字架」には、彼の信仰的決意が明確に現れています。延禧専門学校4年目、23歳の時のものです。

右は韓国語の聖書（改訳ハングル版）ルカ13:32-34。ハイライトは「わたしが行くべき道を行かねばならない」



십자가←

←

쫓아오던 햇빛인데↓
지금 교회당 꼭대기↓
십자가에 걸리었습니다.←

첨탑이 저렇게도 높은데↓
어떻게 올라갈 수 있을까요.←

종소리도 들려 오지 않는데↓
휘파람이나 불며 서성거리다가,←

괴로웠던 사나이,↓
행복한 예수 그리스도에게↓
처럼↓
십자가가 허락된다면←

모가지를 드리우고↓
꽃처럼 피어나는 피를↓
어두워 가는 하늘 밑에↓
조용히 흘리겠습니다.←

十字架

1941.5.31

追いかけてきた日の光が
いま 教会堂の尖端
十字架にかかりました。

尖塔があれほど高いのに
どうして登ってゆけるでしょうか。

鐘の音も聞こえてこず
口笛でも吹きつつ さまよい歩いて、

苦しんだ男、
幸福なイエス・キリストにとって
そうだったように
十字架が許されるのなら

首を垂れ
花のように咲きだす血を
暗くなってゆく天の下に
静かに流しましょう。

尹東柱は、夕日を受けて輝く礼拝堂尖端の十字架を見つめていました。自分はそのよう

な高みには登って行けない。イエスに従って苦しみの道を歩み通すことはできない。

「鐘の音も聞こえてこず／口笛でも吹きながらさまよい歩いて……」

教会の鐘の音が自分を呼んでいるように、促しているように聞こえる。それが辛いのです。鐘が聞こえない遠いところまで行って、口笛でも吹きながらもっと楽な生き方をしようかと思えます。しかし遠ざかれば遠ざかるほど、かえって強く引かれる。イエスの思いが、またイエスへの思いが迫ってくる。それでまた、さまよった末、十字架のもとに戻って来ます。

「苦しんだ男、／幸福なイエス・キリストにとって／そうだったように／十字架が許されるのなら

首を垂れ／花のように咲きだす血を／暗くなってゆく天の下に／静かに流しましょう。」

イエスは苦しんで生きて苦しんで死んだ。しかし神のために、人のために苦しむことは幸福なことであった。そのような生き方が自分にも許されるなら……「花のように咲きだす血を／暗くなってゆく天の下に／静かに流しましょう」。

死をかけて、命をかけて十字架の道を歩もう。

まるで4年後の自分の死を予見・覚悟しているかのような詩です。

最後に紹介するのは「序詩」です。これは元々題のない詩です。彼が専門学校生だったときに詩集『天（そら）と風と星と詩』を出版しようと願って、時局がら実現しなかった。その自筆詩集の冒頭に置いたのがこれです。序として置かれたので序の詩「序詩」として知られるようになりました。「十字架」の詩から半年ほど後に作られたものです。

1941年11月20日の日付がついています。卒業の日が翌月に迫っています。戦争体制により学期短縮ということで卒業式が早まり、12月になったのです。卒業後の進路のことを彼は考えていたはずですが、日本に留学することを考え、悩み、また祈っていたのではないのでしょうか。

서시←

序詩

1941.11.20

←

←

죽는 날까지 하늘을 우러러↓
 한점 부끄럼이 없기를,↓
 잎새에 이는 바람에도↓
 나는 괴로워했다.↓
 별을 노래하는 마음으로↓
 모든 죽어가는 것을 사랑해야지↓
 그리고 나한테 주어진 길을↓
 걸어가야겠다.←

死ぬ日まで天を仰ぎ
 一点の恥なきことを、
 木の葉に起こる風にも
 わたしは苦しんだ。
 星をうたう心で
 すべての死んでゆくものを愛さなければ
 そしてわたしに与えられた道を
 歩みゆかねば。

오늘밤에도 별이 바람에 스치운다.←

今夜も 星が 風にさらされる。

「天を仰ぎ」——これは、福音書のイエスの姿を思わせます。韓国語の聖書にまさしく「하늘을 우러러」(ハヌルル ウロロ)が出て来るのです。たとえばマルコによる福音書第6章41節

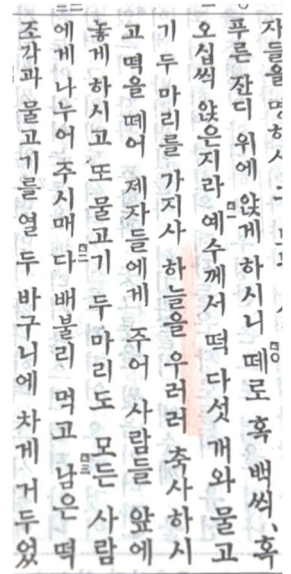
「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。」

また同じマルコによる福音書第7章32節。

「人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置いてくださるように願った。」

そのときイエスは指を彼の両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。「そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かつて、『エッフアタ』と言われた。」7:34

イエスは、人々の飢えを心配し、「天を仰いで」祈られた。人の苦しみに嘆息して「天を仰」がれました。



マルコ 6:41 「天を仰いで」

尹東柱は幼いときから聖書を読んで成長しましたから、このマルコ福音書のイエスの「天を仰いで」「하늘을 우러러」(ハヌルル ウロロ)をよく知っていたはずで、イエス

の祈り、願い、呻きを、自分の祈り、願い、呻きと、彼は重ねていたのではないのでしょうか。イエスの道を思い、自分に与えられた道を思って、一点の恥のない生き方をしたい。

「星をうたう心で／すべての死んでゆくものを愛さなければ／そしてわたしに与えられた道を／歩みゆかねば。」

星は天から差ししてくる光です。またその星とは、自分の願い、祈りなのかもしれません。

「今夜も 星が 風にさらされる。」

星は激しい風に吹きさらされる。風は時代の悪しき風ともとれ、あるいはそれとは違って自分を促す聖霊の息吹ともとれます。命あるもの、死んでいくものすべてを愛したいという願いを、その姿勢をしっかりと保って歩んでいきたいのです。

「わたしに与えられた道を／歩みゆかねば。」

翌年 1942 年春、彼は海を渡って立教大学に留学しました。そこで 1 学期を過ごしたあと、秋には同志社大学に移ります。翌年 1943 年 7 月、彼は特高に逮捕され、治安維持法違反の容疑で取り調べを受けます。そして懲役 2 年の判決を受け、福岡刑務所に投獄されます。今から 78 年前の 1 月下旬の今頃、彼は冷たい刑務所の独房で凍えていたのではないのでしょうか。

1945 年 2 月 16 日未明、尹東柱の最期について福岡刑務所の看守のひとは次のように語ったと言われます。

「東柱さんは、何の意味かわからぬが、大声で叫び絶命しました。」

イエスの最期とあまりにも似ています。満 27 歳でした。

日本の国は彼を死に追いやりました。ほんとうに痛ましく、日本人として申し訳なく思います。

けれども彼の同級生であり竹馬の友であった文益煥^{ミンイックファン}牧師——韓国の民主化運動のリーダーのひとりであった方——は、尹東柱への追悼文でこう言っています。

「彼にあってはすべての対立は解消された。その微笑にただようあたたかさに解けぬ氷はなかった。すべての人が血を分けた兄弟だった。わたしは確信をもって言うことができる。福岡刑務所で息を引き取るとき、彼は日本人のことを考え涙を流しただろう、と。人間性の深みを見すえその秘密を知っていたから、だれをも憎むことができなかつただろう。」

「彼の追憶を書くことによって、わたしの人生は清らかになる。それほど彼の人生は清らかだった。」

尹東柱が息を引き取ってから 78 年たって、日本の国はどうなったでしょうか。尹東柱を死に追いやったのは治安維持法でしたが、2017 年、今から 5 年前に改正された「組織的犯罪処罰法」にはいわゆる「共謀罪」が含まれています。これは「計画・合意」という段階で犯罪とされてしまうもので、治安維持法の再来と懸念されています。

尹東柱は「すべての死んでゆくものを愛さなければ」と歌いました。そのようにあらゆる命を慈しんだ彼のことを思うとき、今の日本がなそうとしていること——大規模な軍備拡張——を間違ったことだと思わずにはられません。

「死ぬ日まで天を仰ぎ」 わたしたちも天を仰ぎ、神に与えられた道をまっすぐに歩みたいと願います。